

「宇和島の思い出（で）」→ デスクトップPCからスマホまで

私が開業したのが、1984（昭和59）年のことで、それまで勤めていた事務所では、業務用の専用コンピュータとワープロ専用機を使っていたが、開業時に、「キューハチ」と呼ばれるNECの9800シリーズのデスクトップパソコンを購入した。

ディスプレイの解像度は、640×400。今から考えれば、ショボい画面だったが、それまでのモノクロの世界からカラーの画面になり、アプリケーションソフトが入ったフロッピーを差し込むとワープロにも表計算にもなる。さらには、ゲームにもなって、仕事の後、「信長の野望」や「三國志」などで遊ぶこともできた。

ソフトがなければタダの箱と言われ、起動するまでカタンカタンと壊れそうな大きな音をたてるけれども、ソフトさえ入れれば何にでもなる魔法の箱を手に入れた気分だった。

特に、ワープロソフト「一太郎」は、ワープロ専用機とは比べものにならない優れもので、仕事で使う普通の文書ならば自由自在に作れたし、漢字変換機能は、読み方は同じでも文脈から判断して、ほぼ正確な漢字が最初に出てきた。現在ではマイクロソフトの「ワード」が主流だが、当時は「一太郎」が圧倒的なシェアを占めていたし、今でも私を含めてたくさんの方が「一太郎」を使っている。

ここで、一太郎とワードの逆転の歴史に少しだけ触れておきたい。Windows98が出た頃、パソコン各メーカーは、「ワードとエクセル」または「一太郎と花子（お絵かきソフト）」をプリインストール（あらかじめインストールされた状態で販売）した2つのモデルを発売した。この2つのどちらを購入するかと言えば、当然、表計算ソフト＝エクセルが入っている方が有利に決まっている。結果、ワープロとしては一太郎の方が断然使い勝手が良いにもかかわらずエクセルとセットで売られたワードの方が多数を占めるに至った。

話は1990年頃に戻るが、ノートパソコンが登場した。最初に出したのは東芝だったが、やっぱりキューハチが

欲しくて、少し遅れて出た98ノートを購入した。初めのうちは、嬉しくて持ち歩いてしたが、結局、重すぎて断念した。

そして、いつ頃のことだったか、ネット通信が本格的に始まった。とは言っても、当時は、電話回線を使ってピーピュルルと大きくて愉快ではない音。使っている間は電話料金が掛かるので、とにかく短時間しか使えなかった。それでも、電子メールで意思疎通ができ、それまでは書物から必要な情報を探し出すのが大変だったのがインターネットで簡単に検索することができるようになったのは、革命的だった。

2000年頃、「ユビキタス」（いつでもどこでも、意識する事無く、コンピュータやネットなどを利用できる状態）という言葉が盛んに言われはじめたが、「湯引きレタスって何？」とか聞く人もいたほどで、「ユビキタス」社会なんていつ頃、来るのか、どんな形になっているのか想像もできなかった。

今では、それが当然の世の中になって、「ユビキタス」という言葉さえ誰も言わなくなった。多くの方がスマートフォン（短くすると、何故か「スマホ」）を持ち歩き、まさに、いつでもどこでもネットを利用できる。

36年前のデスクトップPCと比べると、小さくて手のひらに乗るのに何倍もの解像度、多数のアプリが同時に使える。それどころか、動画を見るだけでなく配信もできる。コロナ感染予防のために集まれなくてもWEB会議もできる。等々

これから先のIT技術がどんなふうに発展していくのかは想像もできないが、ついて行ける限りポジティブに対応していきたい。

（関住協世話人 横山幸一郎）

🌀 次回のタイトルは、「て」から始まることばです。